

クリスチャンの信仰とは個人的な関係でもあり、同時にコミュニティの中での関係でもある。個人的であるというのは、イエスは私個人にとってどういうお方なのか、という答えを自分で見つけなくてはならないから。コミュニティという意味では、本当の信仰とは神と他の人たちの関係の中で実践されるものだからである。イエスは地上の信者の群れを去り父のもとに戻られる前に、まだ神を知らない人たちに対する証人となるよう、共同体としての生き方を示された。旧約のユダヤの人々が神の民として聖別されたように、今や教会がそのようなコールを受けている。今日の箇所では赦しについてイエスがどのように教えられているか見ていこう。イエスは主の祈りの中で「私たちの負いめをお赦しください。私たちも、私たちに負いめのある人たちを赦しました」と祈るよう教えられたが、祈りについての教えの後イエスはこのようにおっしゃった。

1. もし人の罪を赦すなら、あなたがたの天の父もあなたがたを赦してくださいます。しかし、人を赦さないなら、あなたがたの父もあなたがたの罪をお赦しになりません。(マタイ 6:14-15)
 - a. 赦しは信者の集まりの中で基盤となるものであるが、当時の文化的背景からは、赦し憐れみを見せるのは弱さの現われであった。ローマ社会は残忍で、苦しみに対して無関心であった。同情や憐れみは弱いと見なされ軽蔑された。
 - b. そのことを踏まえて考えると、イエスの赦しに対する教えがいかに急進的で当時の考えに反するものであったかということがわかる。神に従う人はこの世にいなながらこの世のものではないということ覚えていなくてはならない。旧約では繰り返し神の民が生活の中に外部からの影響を受け、そのたびに神は民に対する好意を取り払わねばならなかった。同じように教会もこの世の影響を受けると、クリスチャン同士および神との交わりが妨げられる。

2. そのとき、ペテロがみもとに来て言った。「主よ。兄弟が私に対して罪を犯したばあい、何度まで赦すべきでしょうか。七度まででしょうか。」イエスは言われた。「七度まで、などとはわたしは言いません。七度を七十倍するまでといます。(マタイ 18:21-22)
 - a. ここでイエスは信者間の罪の問題について教えられている。罪がもたらす結果、信者間の罪の取り扱い、そして罪を赦すことの大切さが語られている。
 - b. 罪を犯している人に対する扱いについてイエスが教えられると、ペテロが弟子たちを代表して口を開いた。罪を赦すことも、罪を訓戒していくことも同じように大切である。赦しについて語っていると訓戒の大切さが薄れがちになるが、神の国ではどちらも強調しすぎてはいけない。
 - c. そこでペテロは何度まで赦すべきかと質問する。7回というのは十分な回数に聞こえるが、イエスは7度を70倍するまでとおっしゃった。このことからイエスの基準は完全であることがわかる。そう考えると私たちの中に完璧な者はいないし、イエスの基準に近づく努力は必要だが同じレベルに達することはできない(イエスの基準とは天の御国で見られるものである)。その到達できない部分が私たちにとって赦しが必要な部分なのである。
 - d. このたとえば赦しの重要性、神の赦しとはどのようなものか、そして私たちが人を赦さないとどうなるか、ということをお話している。